

竜の子 奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER



Contents

- P.2 一語一会
- P.3 第28回交流会レポート
(金沢旅行)
- P.5 第29回交流会レポート
(日光旅行)

その夢は、きっと世界を変えていく
The dream surely changes the world.

SPECIAL REPORT II (モンゴル)



- P.8 竜の子近況報告
- P.12 竜の子(OB・OG)近況報告
- P.14 SPECIAL REPORT I
SPECIAL REPORT II
- P.16 編集後記

第17号
Mar.2016

Tatsunoko Foundation

公益財団法人 竜の子財団

平成27年度のご卒業の皆様、また、平成28年度のご入学の皆様、此度は誠にありがとうございます。心より御祝い申し上げます。この春より、夫々が夫々のスタートを迎えるわけですが、どうぞこの「一期一会」の言葉を心に、夫々の道をお進みくださいませ。

平成20年度、鎌倉円覚寺に於いて行われた第11回交流会にて、竜の子の皆様が体験された茶道と座禅でもお話させて頂きました言葉です。

「一期一会」とはこのコーナーのテーマでもあります。一生に一度の出会い（「一期」は人間の一生、「一会」はただ一度限りの会合のこと。『茶席の禅語大辞典』参考）、一生に一度に出会う言葉、「一語」「一会」という、そのものを指す語であります。

また、私の生きる茶の道に由来する「一期一会」の解釈には、生涯の中でただ一度の出会いである今日を、是好日として大切にしていこうという誓願が込められています。

井伊直弼の『茶湯一会集』の序説に、「抑、茶湯の交会は、一期一会といひて、たとへば幾度おなじ主客交會すとも、今日の会にふたゝびかへらざる事を思へば、実に我^{わが}一世一度の会也。」と云われています。

所謂、「茶会に臨む際は、その機会は二度と繰り返されることのない、一生に一度の出会いであるということを得て、主客共に互いに誠意を尽くす心構えを意味しますが、例えば、これからも何度も会う人、仮に毎日会う人でも、いつでもどのような時でも、もしかしたら二度とは会えないかもしれないという覚悟で大切に人と接しなさい。」という戒めの言葉でもあります。

利休道歌の中で茶道の点前についても「何にても置き付けられる手離れは 恋しき人に別るゝと知れ」と教示されています。丁重の上にも丁重に、あたかも恋しき人と別れる気持ちで、人にも道具にも手を合わすということが「一期一会」の心であり、点前の中に敬虔で厳粛な祈りと願いが作法となって表象されているのであります。

「一期一会」とは単に人と人との出会いだけでなく、時間との出会いであり、物との出会いであり、更に尊いことは自分との出会い、本当の自己をみつめるということが大事なことなのです。そのすばらしい邂逅こそ人間を完成に導く原動力でありましょう。どうかこの先、いつでもどのような時でも何処に居ても、日々の「一期一会」を大切に、皆様お健やかに、この素晴らしいスタートを迎えられますことを心よりお祈り申し上げます。



桑原 宗典

■略 歴

- 1990年 裏千家学園を経て裏千家茶名専任講師資格取得
- 1993年 裏千家茶道教室 茶道講師 茶花講師始める
- // JALインフォテック 茶道部講師始める
- 裏千家助教授資格取得
- 2003年 鎌倉女学院特修科 茶道講師始める
- 2008年 宝塚造形芸術大学大学院修士課程修了
- 修士学位取得
- 2010年 国際伝統芸術研究学会発表
- 学会名「第一回国際伝統芸術研究会」
- 題目「利休における茶花」
- 2012年 宝塚造形芸術大学大学院博士課程修了
- 芸術学博士学位取得「利休の茶の花」
- 2015年 青稜中学校・高等学校 茶道講師
- 2016年 IBM茶道部茶修会 茶道講師

2005年より茶花講演会、添釜等、華道家や陶芸家、古美術家とのコラボレーション茶会、茶事等にて日本の伝統藝術の「古典」と「革新」を次世代に伝える。

■高級抹茶使用の化粧品「KIBIKI」イメージキャラクター

「一語一会について」

竜の子奨学生にとって、財団関係者からの励ましの言葉は、大変貴重なものです。そして、竜の子奨学生には、その言葉は一生に一度の出会いであると心得て、そこから多くのことを学んでほしいという願いを込めて、このコーナーを「一語一会」と名付けました。

ご寄付いただいた皆さまへ

いつも温かいご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。竜の子奨学生を代表して心より御礼申し上げます。皆様からのご支援のお陰で、私達竜の子奨学生は勉強と研究に専念することができます。また、金銭面のみならず、精神的にも安定し、自分の夢に向かって充実した留学生活を送っています。さらに交流会を通して私達は、日本の歴史や文化についての視野も広がりました。これからも自分の夢を叶えるよう努力するとともに、国と国の架け橋となり、少しでも社会に貢献できるように頑張りたいと思います。

今後も私達の成長を見守り下さいますようお願い申し上げます。

(平成27年度竜の子奨学生 電気通信大学大学院 グエン・ドク・ティエン)

第28回交流会レポート

平成27年8月1日～8月2日、竜の子財団の第28回交流会は能登半島で行われました。兼六園、輪島朝市、能登金剛のような能登半島の文化と自然を代表できるスポットを見学し、充実した二日間を過ごしました。今回の交流会は、竜の子奨学生たちにとって日本文化の勉強ができる貴重な機会であり、さらに奨学生同士の絆も深まりました。

● 一日目 ●

待ちに待った、その日が来ました。8月1日は竜の子財団第28回交流会の日でした。早朝8時半ごろ、竜の子奨学生たちは予定通り東京駅に集合しました。今回、旅先はサプライズとされていたため、みんなワクワクしながら旅先の推測を語り合っていました。再会の喜びと旅への期待で、奨学生たちは満面の笑顔で溢れています。そしてついに、「金沢です」と旅先が告げられ、全員から歓声が上がりました。いざ、北陸新幹線に乗り、金沢に向かって出発！

11時半ぐらいに、金沢に着きました。まず、鼓の形をしている金沢駅の迫力に魅了されました。この壮大な建物は、伝統的な様式と近代建築との調和が取れていて、まさに金沢のシンボルでしょう。そこで、関西から来た竜の子奨学生たちと合流し、バスで兼六園まで移動しました。

兼六園は、日本三名園の一つとして有名で、日本の庭園文化を代表できる名園です。「兼六」とは、六つの相反する美しさを兼ね備えるということです。霞ヶ池に巡り、この六つの名勝が点在しています。私たちも霞ヶ池を巡り、散策しました。蝉時雨の中、幽径を辿りながらいろんな角度で庭園の美しさを楽しみました。どの角度でも、絵になりそうな風景が広がっています。澄んでいる池にはたくさんの錦鯉が優雅に泳ぎ、木々の陰に心地のいい風が吹き、清涼感のある雰囲気醸し出されている。霞ヶ池を背景に、みんなで記念写真を撮り、次のスポットへ向かいました。



兼六園の明治記念之標にて

次は、九谷焼の絵付け体験でした。九谷焼とは、石川県で生産される伝統色絵の磁器です。九谷焼の特徴は、「呉須（ごす）」とよばれる藍青色で線描きし、「五彩」とよばれる、赤・黄・緑・紫・紺青の5色での絵の具を厚く盛り上げて塗る彩法です。体験先の先生に連れられ、私たちはまず工房を見学し、色々な九谷焼の作品を鑑賞しました。そして、先生は陶器を手作りしながら、九谷焼の製造工程を教えてくださいました。次はいよいよ本番で、竜の子奨学生たちは自分の手で九谷焼製造工程の一環である絵付けを体験しました。ほとんどの人は未経験ということで、緊張してどこから取り掛かればいいのかわからなかったのですが、進むにつれだんだんと慣れてきて自分の個性や考え方を入れながら、一心不乱に描けるようになりました。数式、キャラクター、抽象画など、デザインのアイディアは豊富で、百花繚乱となりました。絵付けを加えた陶器は職人の焼き上げ作業を経て次の交流会でみんなの手に届くので、次の交流会への楽しみともなりました。



九谷焼制作を見学

午後2時半ごろ、絵付けの体験を終え、ひがし茶屋街をぶらぶら見学しました。金沢の粋が詰まったこの街は、金沢旅行の定番となっています。街中に様々な老舗が並び、昔の面影が残っています。観光客は多かったのですが、落ち着いた雰囲気が漂っていました。日本全国で使用される金箔の9割以上金沢で作られているので、ひがし茶屋街にも金箔が施された品物が沢山あります。その中で、金箔をつけたソフトクリームが流行っているらしいです。ここで私たち全員でその黄金のソフトクリームを食べてみると、非常に美味しく、思い出に残りました。



ひがし茶屋街で散策



ひがし茶屋街で大人気の
黄金ソフトクリーム

午後5時ごろ、ホテルへと向かいました。今回は、和倉温泉の温泉旅館に泊まることになりました。和倉温泉でゆっくりと一日の疲れを取り、金沢のおいしい料理で体力を回復した後、この楽しい一日はまだ終わりません。好運にも恵まれ、この日はちょうど「石崎奉燈祭」本祭の日でした。みんな



浴衣姿でお祭り見学



石崎奉燈祭

は浴衣姿となり、祭りに足を運びました。

竜の子奨学生たちにとって、祭りという日本の夏の風物詩は身近な存在ではありません。幸いにもこのチャンスを得て、祭りの熱気にもおされ、全員で盛り上がりました。「石崎奉燈祭」には、「キリコ」という巨大な灯籠を数十人で担ぎながら進む行事を行います。その勇壮な姿をみながら、この充実した最高の一日が終わりました。

● 二日目 ●

翌日も、好天に恵まれました。温泉旅館を去り、日本三大朝市の一つである輪島朝市を見学しに行きました。

鮮魚、青果、漬物、干物及び輪島塗。地元の豊かな物産を誇りに、輪島朝市の独特の賑わいぶりを見せていました。元気な呼び声があちこちに響き渡っています。竜の子奨学生たちはゆっくりと地元の果物やお菓子などを試しながら朝市を回りました。アワビなど海の幸も売られていて、試食を勧められました。売店のおばさんたちが非常に親切で、皆はここで試食しながらお土産を買いました。朝市でしか味わえない風情を楽しめ、心地よいお買い物体験でした。

輪島朝市の見学を終えた後、しばらく歩いて、輪島キリコ会館という「キリコ祭り」専門の博物館に着きました。もし時間がちょっとずれて、昨日の「石崎奉燈祭」に参加できなかったら、おそらくほとんどの竜の子奨学生にとって「キリコ」は初耳でしょう。しかし、好運に恵まれ、昨夜の石崎奉燈祭をエンジョイしたため、ちょうど「キリコ」に対し興味津々だったのです。

キリコとは、切り灯籠（きりことうろう）を縮めた略称で、能登の祭りに華を添える祭礼大道具です。夏から秋にかけ

て、地元の人々が巨大なキリコを担ぎ、町中を練り歩きます。博物館には、様々なキリコを並べ、まるで祭りのような雰囲気を作り上げています。その中で、高さが15メートルにも及ぶキリコが何本もあり、私たちを驚かせました。観賞ルートに沿ってキリコの迫力と壮観さに圧倒されながら歩いて、二階に着くと、キリコ祭りのビデオが流れています。「日本人はお祭り好きだ」とよく耳にしますが、ここでビデオを見ながら昨日の祭りの盛り上がりを思い出し、何となくその「お祭り好き」の気持ちが分かったような気がします。

輪島キリコ会館の見学のあと、小さなエピソードがありました。会館の三階には展望ロビーがあり、そこで海を眺めたところ、沿岸には釣りをしている人がいました。よく見ると、やはり釣り好きの秋元理事長たちでした。竜の子奨学生たちが釣りの様子を見に近づいたら、理事長から優しく釣りのやり方を教えていただき、そして一人ひとり釣りをトライすることになりました。不思議なことに、竜の子奨学生の誰もがオモリとエサを投げるとすぐに魚がかかりました。改めて、能登半島の海の豊かさに感心しました。

昼食は能登半島の新鮮な海産で作った海鮮丼で、いわゆる

「能登丼」のことです。食器も輪島塗のもので頂き、能登の美味しさをたっぷり味わいました。

食事が済み、次は能登金剛までバスで向かいました。能登金剛は能登半島の代表的な景勝地であり、特に巖門という波蝕で形成された天然の洞門で有名です。私たちは長い階段を下り、海岸線に沿って観覧しました。長く続いている険しい岩場はとても壮観で、その迫力で圧倒されました。展望台に上って、巖門に波が打ち寄せている眺めも楽しむことができました。

能登金剛を後にして、最後のスポットへ向かいました。千里浜なぎさドライブウェイという、車で砂浜を走れる日本でここだけのドライブウェイです。ビーチの中を走っているバスに乗るなんて、とても不思議な体験でした。晴天下より寄せ波が近くに見えます。その爽快感は他所に感じられません。

一泊二日の交流会は、ここで幕が下りました。私たちは、今回の交流会で能登半島の自然と文化を満喫し、日本文化への理解がさらに深まりました。竜の子奨学生が忙しい留学生活から解放され、久しぶりの仲間との交流が図れ、心身ともにリフレッシュしました。



キリコ会館の中で、迫力満点のキリコがいっぱい並んでいる

(担当：平成27年度竜の子奨学生 北海道大学 馬 千駒)

第29回交流会レポート

竜の子奨学生の第29回交流会は平成27年12月4日～5日に栃木県日光で行われました。江戸時代の文化や生活を体感できる江戸村、ユネスコの世界遺産である日光の社寺、現在から500年ほど前に発見された足尾鉾山、また「生きることの素晴らしさ」を感じさせる富弘美術館を見学し、一層日本文化を感じ、実りたくさんの交流会となりました。

● 一日目 ●

朝8時半、新宿で半年ぶりに会う竜の子奨学生達の顔には笑顔が浮かんでおり、最近のできごとや研究の様子などについて楽しく話し合っていました。もっとも話題となったのは「今回どこに行くの?」でした。一泊二日の交流会はいつもの通り行き先は「サプライズ」とされ、出発するまでは「秘密」となっていました。天気はとても晴れていて、空は青く、白い雲がたくさん浮かんでバスとともに、深秋の栃木へ旅立ちました。とても良い旅行日和でした。

三時間ぐらいバスで沿道の風景を眺めたら晩秋の紅葉に染められた山々は、みんなを歓迎しているように鮮やかな色となっていました。綺麗な風景を通り抜けながら最初の目的地「江戸ワンダーランド・日光江戸村」に到着しました。

1986年から開設された江戸村は江戸時代の文化や生活を集大成したテーマパークで、江戸時代中期の街並みを再現しています。実際、江戸村に入ると現代から完全に抜け出したような雰囲気にもまれ、タイムマシーンに乗って過去に行った感じがしてきました。江戸村で美味しい焼肉を食べた後は、「江戸時代巡り」が始まりました。私たちがまず向かったのは江戸村の劇場でした。劇場は七つもあり、もっとも人気なのは「忍者からす屋敷」と「大忍者劇場」で、入り口の前には大勢の人が並んでいました。「大忍者劇場」は忍者時代を再現し、忍者の動きがとても俊敏で隠密でした。また忍者からくり格言迷路があり、中に入ると忍者の格言などが次々と現れ、それをきっかけにみんなで出口を探していました。忍

者怪々亭は忍者の修行場と言われ、中に入ると方向感覚が混乱してしまい、重力そのものを疑ってしまう、いわゆる「重力部屋」です。これら以外にも江戸町を歩きながら、「江戸町火消資料館」や「手裏剣道場」などで江戸時代の人情を体感しました。

日が暮れると、江戸時代体験も幕を閉じました。その後バスに戻って、宿泊地の温泉旅館に向かいました。温泉で心身



泥棒が捕まったぞ!!

ともに癒し、その後は晚餐会を迎えました。日本文化について勉強する時、よく「日本料理は味を楽しむだけでなく、目で楽しむ」と聞きましたが、日光地元の会席料理もその通り、美味しくて彩りがよく、非常に素敵でした。その上で、みんなでワイワイしながら、写真を撮り、愉快的雰囲気交流会の一日目を締めくくりました。



江戸ワンダーランドで江戸ニャンと記念写真

● 二日目 ●

交流会の二日目もとても良い天気で、ベランダから遠山の紅葉が綺麗に見えました。朝風呂に入り、朝食を済ませた後、バスで日光社寺に向かいました。40分ぐらいのバスでガイドさんがこれから行く日光の社寺の事情や、熊除け法などを紹介してくれました。日光社寺は1999年12月にユネスコ世界文化遺産として登録され、「二社一寺」すなわち、東照宮、二荒山神社、輪王寺で構成されています。また、山が多いとされる日光では熊もよく現れるとされますが、肉食ではなく草食の熊だそうです。熊の腕には関節がないため、熊に遭遇した時逃げられなかったら、一気に熊の懐に潜り込むのも助かる可能性があるかと話していました。潰されそうですが、それで本当に助かった老婆がいたようです。このような話をしていると、あつという間に「二社一寺」の日光山輪王寺に着きました。輪王寺の歴史は奈良時代まで遡り、近世に至っては徳川家の庇護を受けて繁栄を極めたと言われています。重要文化財で日光山総本堂である三仏堂が五十年ぶりの大修理を迎えたが、内堂まで伺うことができました。裏道を通り、三仏堂の裏にある東照宮に着きました。東照宮は源義朝による日光山造営まで遡れるが、長い歴史の背景に徳川氏が東照宮を造営したと言われていて、2016年で400年記念を迎えます。東照宮で有名なのは「猿」の彫刻だそうです。私たちは、

「見ざる・言わざる・聞かざる」については聞いたことがありましたが、その彫刻は厩の長押上にあるのは初めて知りました。昔から猿は馬を守るとされることから由来し、猿の彫刻が八面あり、人間の一生の風刺画とされていました。東照宮の後は日光二荒山神社にて見学しました。二荒山神社は縁結びで有名であり、また「好きなら一緒」というイメージを構成した「杉と檜のやどり木」があり、そこでみんなの記念写真を撮りました。



人生の流れをサルで書いた小屋

午後になり、まず向かったのは足尾銅山です。足尾銅山は1550年に発見されたと伝えられていますが、1610年百姓二人が鉱床を発見し幕府直轄の鉱山として本格的に採掘が開始されました。その後、足尾町は銅山で大いに繁栄し、「足尾千軒」といわれるような発展を遂げ、当時の代表的な通貨で寛永通宝が鑄造されたこともありました。現在は製錬施設を利用して産業廃棄物リサイクル事業を行っているのみです。私たちが訪ねた坑道は総延長1234kmに達し、東京から博多間の距離になるそうです。坑道は“日本一の鉱都”と呼ばれ、江戸時代、明治・大正時代、昭和時代の手掘の様子から機械化された鉱山の様子まで再現し、日本国内最大の坑内観光となります。坑内は暗く静かで、天井から水滴が落ちるぽとぽとの音が聞こえました。私たちは坑道を歩きながら、当時の作業会話録音などを聞き、鉱山の歴史や内容、鉱山のもつ様々な仕組みを知ることができました。



シャリアズさんと坑夫

坑道観光の次は、桐生駅からわたらせ渓谷鉄道に乗り富弘美術館へ出発しました。一両編成の汽車は、スクールバスのように、すっかり修学旅行の雰囲気になりました。50分ぐらいの乗車時間に、汽車からしか見ることができない絶景をたくさん見ました。山谷に流れる小川は狭く水勢が激しく、小川に磨かれ岩は真っ白に変身しました。それらを囲んだ杉の木は緑のまま絶景を守っていた。またクリスマスを間近に、トンネルに入った時は車内のイルミネーションが見えました。そうしているうちに目的の「神戸」駅に到着しました。同じ「神戸」と書いて「こうべ」ではなく「こうど」という読み方で、一層日本語の多様性を実感しました。



三二電車で富弘美術館へ

「富弘美術館」は群馬県みどり市東町出身の星野富弘さんの作品を公開しています。水彩で絵と文字が一つの画面に調和し、独特な「詩画」の世界を構成したことで有名ですが、実際その「詩画」の世界に身を置くと、感動より激しく、魂を揺さぶられた感じがしました。星野富弘さんは1946年に生まれ、24歳の若い年齢で頸髄を損傷して手足の自由を失いました。入院中に口に筆をくわえて文字や絵をかき始め、その後世界各地で「花の詩画展」を開催し、2014年まで富弘美術館入館者は650万人を超え、星野さんは現在も詩画やエッセイの創作活動を継続しています。私たちはその絵画一つ一つ眺めながら、星野さんが描いた平和な世界を感じていました。中にはこの一節がありました。

一枝の花とはいえ

広大な自然の風景を見る思いだった

(星野富弘『花の詩画集』花よりも小さく』(偕成社刊)より)

中国では「一花一世界、一草一天堂」という言葉があり、心に雑念がなく、落ち着いていれば一輪の花、一本の草からも世界を感じ、世界を悟ることができるという意味です。星野さんの一枝の花から広大な自然を想像するのと一致しており感銘を受けました。

美術館を出ると、バスに乗り東京へ向いました。たくさんの景色を見て、自然と人情を感じる二日間でした。その風景にはいろいろなものが入っていました。その匂いや音、肌触り、またその場にいた人々の思い出が詰め込まれていました。これから先も鮮やかに私たちの心に残り続けると信じています。



(担当：平成27年度竜の子奨学生 東京大学大学院 榎 慧)

竜の子近況報告



発表の様子

キン コウカ
金 香花 (中国・黒龍江省出身)
 京都大学大学院 文学研究科
 思想文化学専攻 博士3年

「博士論文に向けて」

2015年12月12日には、博士論文構想を発表する研究会がありました。内の研究室の慣例として、研究室卒業の先輩の先生方が集まり、D3の在学生在が発表する博士論文構想に対して意見を述べてくださる行事があります。

「もう少し意地悪をいうと…」から始まる厳しい意見は、どこの研究会でも聞くことができないぐらいです。一番恐ろしい発表なので、同期の皆さんは一年前から緊張し始めました。恐ろしい分、貴重な意見なので、論文の完成に向けて、大きな応援にもなりました。



東大寺の前で鹿と出会った瞬間

マ センキ
馬 千駒 (中国・広東省出身)
 北海道大学大学院 法学研究科
 民法専攻 修士2年

「卒論で没頭する日々」

師走の12月になると、一層忙しくなりました。卒論を少しずつ進めながら、就活や試験などいろいろ手を進めなければならないこともあり、猫の手も借りたいところ。落ちついて着実に進めるように、頑張ります。

2015年を振り返ると、おかげさまで、充実に過ごせました。これからの行くべき方向をより明確に見えたのは昨年最大の収穫です。



赤ちゃんと一緒に

ホウ メイ
方 梅 (中国・黒龍江省出身)
 九州大学大学院 医学系研究科
 医学専攻 博士3年

「研究と子育てを頑張っています」

2015年8月に無事、男の子を出産しました。母子共々健康です。応援して下さった皆様本当にありがとうございます。9月中旬、学校に復帰しましたが、順調に卒業の為に、今一生懸命勉強しています。今年5月に、私は神戸市で第57回日本神経学会学術大会参加の予定しています。今はデータの準備をしています。



竜の子財団の現役とOBOGの忘年会

キム テヒョン
金 兌炫 (韓国・ソウル市出身)
 京都大学大学院 工学研究科
 機械理工学専攻 博士3年

「学位まで後一步」

今年度、卒業及び学位習得のために頑張りましたが、卒業条件がなかなか揃わなくて苦しんでいました。

しかし、2015年12月21日やっと二つ目の論文が通ったと通知が届き、卒業と学位まであと一つの状況になりました。

やっと今年は就職活動ができるようになりました。これからももっと頑張ります。



久しぶりの卓球

ボウ フクメイ

房 福明 (中国・湖南省出身)

東京工業大学大学院 総合理工学研究科
物理情報システム専攻 博士2年

「運動しよう」

最近忙しくて、毎日研究室でパソコンをいじるばかりです。毎日座ったままだと、体調が崩れやすくなる危険性が高くなりますので、運動を再開しました。週末には家の近くの川沿いを走ったり、平日は大学で運動したりすることができます。先日、大学で久しぶりに卓球をしましたが、写真のポーズでは踊っているように見えますね。皆さんはどうですか？運動をちゃんとしていますか？



友達とご飯中～

オウ アキン

王 姫琴 (中国・江蘇省出身)

明治大学 政治経済学部
経済学科 4年

「忙しくて楽しい毎日！」

ようやく就職先を見つけ、進路を決めたので、最近は卒論で図書館に籠る毎日を送っています。1日ずっと卒論をしようとしても、集中できなく効率が悪い時もあるので、その時は友達とお話をしたり、美味しいご飯を食べたり、一時間でもカラオケに行ったりすることは気分転換ができるし、とても楽しいです！

早く卒論を終わらせて、残りわずかの学生生活の時間を使い自分のしたいことをします！後少しで大学を卒業し、竜の子財団からも卒業してしまい、色々な別れに臨むのですが、後悔のないように今、目の前にいる人とことを大切にします！



空港で母と上の妹ちゃんと一緒に時間

ラ ベイジン

羅 珮菁 (台湾・台中市出身)

名古屋大学大学院 生命農学研究科
生命技術科学専攻 博士1年

「愛を持って研究に努めよう」

この半年は初めてイネの苗作りから収穫まで勉強してきました、農家さんの大変さがきちんと分かるようになりました。その為、今はお米を一層大切にしています。

この頃忙しかったのですが、2015年10月には大親友の結婚式に参加するのに台湾に帰国しました。大親友の結婚を祝福したり、久しぶりに家族との団らんができたり、大変楽しかったです。これからも家族と友達に愛を持ち、お米の研究に精一杯努めていきます。



学会のポスターと

グエン・ドク・ティエン
(ベトナム・クアンビン省出身)

電気通信学大学院 情報システム学研究科
社会知能情報学専攻 博士2年

「中国に行きました」

2015年12月上旬に中国の杭州市で開催された「The 23rd International Conference on Computers in Education」の国際学会へ発表に行きました。今回発表した内容は、チーム・ベースの学習における学習者の能力を推測する精度を向上するための手法を提案したものでした。私の発表セッションの際に多くの方々が聞きに来られましたので少し緊張しました。

今回の学会では、世界レベルの偉い教授方々にも出会うことができたことで自分の視野も広がりました。同時に自分の研究の力がまだまだ不足だと感じたため、これからも頑張りたいと思います。



日中学会で発表する様子

ケン エ
権 慧 (中国・山東省出身)

東京大学大学院 人文社会系研究科
アジア文化研究専攻 博士3年

「論文と共に過ごす日々」

2015年の後半は論文作成とともに充実した日々を送りました。2015年10月中旬に日本中国学会で論文を口頭発表し、来場した先生方々から多くのアドバイスをいただき、現在はそのアドバイスのもとで学会誌投稿論文を執筆しております。論文を書く途中とても体力を必要とされることに実感し、今後もヨガと筋トレを続ける予定です。また、昨秋から村上春樹氏は新作を続々と刊行し、息抜きとして読書も楽しんでいます。



娘と地域の児童館にて

ソルヤ (中国・内モンゴル出身)

東京外国語大学大学院 総合国際学研究科
国際社会専攻 博士2年

「楽しい育児生活」

昨年8月に出産し、娘が7ヶ月になります。積極的に地域のママサロン、児童館の活動に参加し、娘と楽しい時間を過ごしなが、母親同士と子育ての意見交換をしました。秋学期からは休学せずに大学に復帰しました。娘はまだ保育園に入れないので、主人と交代で育児をしています。一昨年ウランバートルで開催された第3回日本モンゴル青年フォーラムで発表した論文が選ばれ、論文集に収録され、昨年8月に出版されました。

出産と育児のため、過去2回の交流会ともに参加できず、次の交流会を楽しみにしています。



楽しい学生生活

ユルダジェヴ・サドラ・ヌルラエビッチ
(ウズベキスタン・ダシュケント出身)

名古屋大学大学院 国際開発研究科
国際協力専攻 博士1年

「学習生活の楽しさ」

安倍晋三首相のウズベキスタンへの訪問をきっかけに、両国の間の学術交流プログラムが強化されています。一つの例としては、ウズベキスタン・日本学術フォーラムが取り上げられます。この間、このフォーラムのもとでオンラインコンファレンスが開催され、ウズベキスタンの6つの国立大学と日本の3つの大学(名大含む)の間に行われました。私はそのオルガナイザーとして参加しました。次回のフォーラムが今年の夏頃に、立命館アジア太平洋大学で行われます。

現在は、世界銀行の元経済学者である大坪教授の講義で、グループのリーダーとして、ベトナムの経済成長の事例についてのプレゼンテーションを用意しています。



家の近くの「ゲジャン」(カニの醤油漬け)のお店です

キム ウンハ
金 恩河 (韓国・蔚山市出身)

筑波大学大学院 人間総合科学研究科
障害科学専攻 博士3年

「久しぶりに韓国に帰りました」

2015年は2回目の追加実験があり、千葉、岐阜、水戸を行き来しながら忙しい毎日を過ごしました。論文の発表や学会参加などであまり韓国に帰ることもできなかったのですが、この年末に韓国に帰って家族と楽しい時間を過ごしてきました。今年は博論を頑張って仕上げ、実りある一年を過ごしたいと思います。韓国に帰るとなにより懐かしい韓国料理に夢中になって体重が増えてしまいます。皆さんも是非韓国に来ておいしいもののいっぱい食べてみて下さい。



ACミラン休憩室
本田圭佑選手の
席で

チョウ クン
張 勲 (中国・遼寧省出身)
北海道大学大学院 水産科学院
海洋生物資源科学専攻 博士3年

「ラッキーな一年」

2015年はラッキーな一年でした。竜の子奨学生の一員になっただけでなく、日本科学協会の科学研究助成金を受けることができました。この一年間、学術面においてはいろいろ成長しました。研究助成金の一部を使って、オーストラリアのケアンズとイタリアのトリエステで行われた学会に参加し、そこで口頭発表をしました。さらに幸運なことに、イタリアの学会でベスト学生発表賞を受賞したことです。そのほか、オーストラリアとイタリアの美しい風景やグルメも体験しました。今年の4月からは北海道大学北極域研究センターに就職する予定です。



ルームメイトに企画してあげた誕生日会の様子
(本人左端)

ソウ キシュン
曾 毅春 (中国・四川省出身)
一橋大学
商学部 2年

「楽しい寮生活」

今回は私の寮生活について紹介させていただきます。私は大学の寮でレジデント・アシスタント (RA) として勤めています。普段の主な仕事は寮の国際交流を推進するためのイベント企画や、緊急時に寮におけるトラブルの対応などです。1人で20人程度の寮生の生活をサポートし、住民間のトラブルなどを解決するのがなかなか大変ですけど、共同生活を通してついでに異文化理解も深められるので、寮生活はとても楽しいです。よかったら皆さんも是非私の寮に遊びにきて下さい。



シンガポールの会場にて (本人左から2番目)

シャリアズ エムディ
(バングラデシュ・チタゴン出身)
立命館アジア太平洋大学
国際経営学部 3年

「ビジネスケースコンペしにシンガポールへ！」

初めて、日本から私の大学は「UOB NUSビジネスケースコンペティション」に参加する唯一の大学として選ばれました。私は経済の戦略家としてそのチームの一員になりました。そのコンペの競争で、異なる多国籍企業に関するケーススタディを解いたりして非常に良い時間を過ごしました。世界16の国からなるトップクラスの大学が参加しており、私も彼らの素晴らしいプレゼンテーションから多くを学ぶことができました。また、シンガポールの周りを旅行し、美味しいシンガポール料理を食べることも出来、本当に楽しかったです。



交代式で、左が第70代前任会長、
右が第70代新任会長の本人

イ サンギョ
李 常揆 (韓国京畿道出身)
早稲田大学 政治経済学部
経済学科 2年

「近況報告」

早稲田大学政治経済学部のイサンギョです。私は昨年、早稲田大学韓国学生会の政治経済学部副会長として一年を過ごしました。早大には約900人の韓国大学生が在学しておりますので、イベントの時は辛いこともありましたが、振り替えてみるととても甲斐のある一年間でした。それで、第71代早稲田大学韓国学生会会長選挙に挑戦し、今年には総括会長として一年間頑張れる機会をいただきました。会長として様々なことを経験し、将来の夢である政治家に向け、一步一步歩いていきたいと思っています。



竜の子(OB・OG)近況報告



電車に乗って保育園
へ向かう途中の息子
と私です

シン チュウカ
申 中華 (中国・河北省出身)
東京大学大学院卒業

「卒業後、リア充な日々を送っています」

2015年3月に竜の子財団を卒業した申中華です。長男の次、昨年8月に長女が東京で生まれました。それ以来、研究と育児で忙殺される日々が続いています。早く育児から解放されるために、今年1月から待機児童がゼロの埼玉県嵐山町に移住することを決めました。地方に行くと車がないのは生活が不便だと聞き、車の免許を取りました。最近週末になるたびに、レンタカーをして家族全員を乗せて東京周辺の公園や遊園地までドライブし、気分転換するようにしています。



妻とふたりで旅行～

リュウ チボン
劉 知凡 (中国・大連市出身)
東京大学卒業

「8回目の引っ越し」

いままでは会社の近くで賃貸を借りて3年ほど住んでおり、周囲の環境などに不満もなく、快適に暮らしていました。しかし、ある日突然に管理会社からアパートの取り壊しの通知が来て、今年4月までに出て行かなければならないとのことになりました。退去を機に、会社の社宅に申し込み、来年からは社宅に住むこととなります。日本に来てからこれで通算8回目の引っ越しとなり、なかなか一つの場所で定住できないですね・・・通勤も電車になって、今までより通勤時間が長くなるので今年からは少し早起きしないとイケないです。



近くに住んでいる友
達が開いてくれた我
が娘の誕生日会

キム ジオン
金 智媛 (韓国・ソウル市出身)
一橋大学在学

「娘が1歳になりました」

2012年度の卒業生金智媛です。私は主人の赴任で2013年4月からアメリカのナッシュビルにいます。昨年9月こちらで生まれた娘が1歳になりました。大人しい性格かと思いきや、食べ物が大好きなとっても活発な子です。小さい子供と一緒にいると、自分のことはあまり上手く出来ず、時々イライラします。でもしばらくはこのような状況ですので、おままとだちと考えて(かなりハードな遊びですが)、楽しく過ごそうと頑張っています。



細胞治療センターで環境モニタリング中

ソン ビンカ
孫 敏華 (中国・天津市出身)
東京大学卒業

「最先端の医療技術、再生医療に従事しています」

再生医療とは、ケガや病気で冒された組織や臓器を自分自身の幹細胞を使って元通りの形や機能を再生する最先端の医療技術です。東京医科歯科大学では現在軟骨・半月板再生などの臨床研究が行われています。細胞培養は「細胞治療センター」で行なわれます。この写真で映っているのは「細胞治療センター」の室内です。室内は細菌等で汚染されないように極めて清潔な環境になるように維持されています。私はここで毎日充実、快樂な生活しています。



メディア取材 (本人右奥)

シュ シン
朱 震 (中国・陝西省出身)
 京都大学大学院卒業

「日中の懸け橋に一步」

2015年に入ってから、現在務めている会社の中国関連事業を担当することになりました。主な業務内容は、中国と日本のゲーム会社それぞれが持つ強みを取り込んだゲームを作り上げることです。今回の事業において、グローバルに通用する日本のゲームの文化と、それを作る際の日本ならではのこだわりを、中国が持つ強い開発能力と合わせる形になります。日本の「文化」と「ものづくり」にずっと強く関心を持っている私にとって、一番望ましいものです。この事業を通して、両国の協力によって生み出される新しい可能性を見つけたいと思います。



東京ビックサイトでの展示会にも参加 (本人左下)

ソン チャンソク
宋 昌錫 (韓国・龍仁市出身)
 東京大学大学院卒業

「ダイナミックな一年でした」

2010年に卒業しました宋 (ソン) です。大きい変化がいろいろあったダイナミックな一年でした。2015年4月には転職しグローバル企業でテクニカルエンジニアとして仕事をしています。その年の12月には木質材料・木造建築分野で実績を積んだ人に与えられる「大熊幹章賞 (木質材料・木質構造技術研究基金)」を受賞しました。また日本の永住権も取得することになり、まだまだ日本で活躍できそうです。



私の実家の大仏と私

トープラサーポン タナワット
 (タイ・ウドンタニー出身)
 東海大学卒業

「帰国した活動」

2015年9月にタイに帰国しました。就職活動を始めようとしたが、1ヶ月間はお坊さんになりました。その間は色々なことをやりましたが結果的には落ち着きました。それから、今はバンコクで生活して、就職活動を行っています。もちろん、日本の会社を中心に就職活動しています。これからも頑張ります。



海外在住ミスベトナムコンテストの画像

レティ テュヴァン
 (ベトナム・ハノイ市出身)
 九州大学大学院卒業

「いろいろな経験をしました」

私は2015年9月に九州大学法学府で修士号を取りました。その間、学内・学外で英語を教えたりイベントでダンスを披露するなどいろいろな経験をしました。加えて、12月に海外在住ミスベトナムコンテストに出る機会もありました。ビデオ、写真コンテスト、スピーチ、日本留学について話すなどした結果、500人の候補者の中から上位20人に選ばれました。このように、ベトナムに戻って仕事を始めるためにできる限りのことをしようと努力しています。

SPECIAL REPORT I

● ゆめ—の形の先生たち… ●

先生：「バングラデシュの近年の識字率は約70%である。発展途上国としては相当な割合だが、この国の4億6千8百万の人口に対してより深く、最新の調査をすれば、識字率はこれよりもっと低いでしょう。」

先生は黒板に、バングラデシュの識字率が実際はどのようなものだったかについて事細かに書いた。私と友人のミファーリーは先生とスマートフォンの情報を見て、ゆっくりと理解していった。私たちが目を合わせると、お互いの目がやる気に満ちていることがわかった。ミファーは在日韓国人の学生であり、第三者のものの方角についての知識があるため、先生の言っている問題についての解決策を考えついた。

ミファー：「リアズ、学校でボランティア活動をして生徒たちの夢をかなえよう。だから、これを叶えるために手伝ってほしい！彼らの好きなものを折り紙で作って、いつでもその折り紙を見られるように部屋に飾るというルールをつくり、夢を叶えることを彼らに思い込ませるようにしよう。」



夢を折り紙で形にした子供たち！（本人右上）

2週間後に1 Semesterが終わり、すぐにバングラデシュへと出発した。たくさんの人に呼び掛けて行くつもりだったが、短期間しか準備期間がなく無理であった。さらにミファーはレジデント・アシスタントという大学の寮で仕事をして忙しいため、スカイプなどで沢山のミーティングを行い、スケジュール調整を行ったのである。

ミファーはバングラデシュへは初渡航であるが、一目見てバングラデシュは美しい国であると感じ、毎年ボランティアを行っている学校で人との交友を持つにもそう時間はかからなかった。しかし、ボランティア活動を行った時、英語を

話せる生徒がひとりもおらず、私もミファーもベンガル語が話せないという、大きな言葉の壁にぶつかった。

私たちは自分たちの意見や夢を生徒全員が分かりやすいように説明をするようにした。ペンと絵画用の筆、色とりどりの折り紙を準備し、すぐにNurture General Schoolという恵まれない子供たちが集う学校へ向かった。ここでは6年生と4日間過ごす機会があり、彼らの手助けをした。町の中心部から25キロ離れたところに学校が所在しているため、インターネットが通っておらず、しかも度々停電に見舞われ大変だった。



一つの部屋で三つの授業を共同で行う！



折り紙を教えている様子

私たちはまず生徒たちに絵を描くようによびかけ、彼らのアイデアを具体化する手助けをした。さらに書道や折り紙など、日本の文化を紹介した。日本の文化紹介では、平和の象徴である鶴の折り紙の作り方を教えた。この時、私たちの予想通り誰も平和についてのイメージができていなかった。平和とは食事をする事、テレビを見ることだ、と答えた生徒さえた。これは子供らしく良い考えだとは思いますが、私たちは彼らに対して、世界に目を向け、夢は大きくもつものだという事を教えるべきだと思った。私たちはこの4日間の交流活動を通して、子供たちの将来の可能性を垣間見ることができた。

「日本はものが簡単に手に入り、バングラデシュのように社会情勢について思いを感じることはないが、日本の子供たちをここに連れてきてこの状況を見てもらいたい。」ミファーはそうしみじみと話していた。

私は笑顔で福岡国際空港へ帰ってきた。なぜなら、とても良いボランティア活動ができ、目標を達成できたからだ。私たちのボランティア活動に携わってくれた人や、今回の渡航を手伝ってくれた人たちに対して、この場を借りてお礼を述べたい。

(担当：平成26年度電の子奨学生 立命館アジア太平洋大学 シャリアズ エムディ)

SPECIAL REPORT II

● 青年フォーラムにおける日モ交流 ●

2014年8月にモンゴル国の首都であるウランバートルで「日モの相互理解」という課題の日本モンゴル青年フォーラムが行われました。私はこのフォーラムに参加し、発表しました。会議の翌日の座談会でモンゴルの大学生と交流し、モンゴルと日本の留学情報を交換しました。その後、地元の先生、学生たちの案内のもと、私たちはモンゴルを二日間見学しました。

中国・内モンゴル自治区では従来の縦書きのモンゴル文字を使うのに対して、モンゴル国では現在、ロシア語と同じ横書きのキリル文字が使われているので、町中の看板が“ロシア的”なイメージが強く、中国・内モンゴル出身の私にとって、驚きでした。

バス見学し、着いたのはウランバートル市の北のゲル地区にある日本人抑留者の霊園ダンバダルジャーでした。慰霊碑の下にある地図にはモンゴルを東西に貫いてまっすぐに伸びるラインがあり、抑留者の霊を日本へと導いていて、日モ両国の友好交流の歴史のシンボルとなっています。平和への想いから始まった新しい友好交流のため、私たちは拝礼し、霊園の中に植林をしました。他にも（2014年に完成した）日本政府の支援で建設された「太陽橋（日本橋）」や道路などの施設も訪れ、両国友好関係への理解を深めることができました。



慰霊碑の下にある地図



日本人抑留死者記念碑の植林にて
(本人右側)

ダンバダルジャー霊園からウランバートル市の中心を通過して、南の郊外のザイサン・トルゴイ（Zaisan Memorialザイサン記念碑）に向かいました。600段ほどの階段を登り、丘



ザイサン・トルゴイ

の上までいくと展望台があり、展望台の前にはソ連兵士の像の彫刻がありました。展望台の中に入ってみると、円形の壁に囲まれていて、その壁には、社会主義時代につくられたソ連・モンゴルの友好の歴史を現すモザイク画があり、社会主義革命、日本帝国軍、ナチスドイツを共に闘い、倒した勝利

の図、平和、宇宙飛行士などが描かれていました。ザイサンの丘からウランバートル市内を一望でき、マンションの建設によって、どんどん大きくなっていくウランバートルを眺めた時、いまが平和であることに感謝しました。

最終日はノミンデパートでの買い物。昔の国営デパートのような印象です。最上階の6階にお土産売り場があり、モンゴルの馬頭琴、フェルトで作ったスリッパ、バッグ、ヒツジの工芸品、モンゴル人形、革製品などモンゴルの名産品が揃っていて、私はモンゴルの民族衣装のハガキ、切手と可愛い人形を買いました。1階の奥はスーパーがあり、品物の種類が豊富で、ほとんどが輸入品でした。さまざまな乳製品とソーセージが置かれ、ズーヒー（クリーム的一种）、アーロール（チーズ）とモンゴル製のチョコレートを購入でき、大満足でした。

その後、馬に乗りたいという声が上がって、バスでモンゴル国西部のトゥブ県に移動しました。都市部で暮らしていた私は、馬に触った経験がなかったので喜びと期待でいっぱいでした。草原の中を車で3時間移動し、目的地につきました。昼食後、遊牧民から、騎馬の説明を受けて、貸出のヘルメットとサポーターを着用し、遊牧民のお兄さんの手助けのもと、馬に乗りました。最初は怖くて緊張しましたが、だんだん馬とリズムを合わせて動けるようになり、速く走ることができました。草原を馬で駆け抜けることは思った通りに爽快で、最高の気分でした。



初めての騎馬体験

ちなみに、モンゴルで食事する時に驚いたことは、ロシアの影響で料理をセットで提供し、フォークとスプーンで食べる習慣があることです。モンゴルの主食は小麦粉で作ったもの



モンゴル国のホーショール

が多く、内モンゴルからモンゴル国に行くと、油で揚げたパイとなり（モンゴル語でホーショール）、サクサクの食感で、中にはたっぷりのヒツジ肉が入っていて、熱々の肉汁が溢れ、とても美味しかったです。

私は、これらの国際交流活動等を通して、様々な宗教や文化背景を持つ人々に出会いました。このフォーラムで、双方の文化理解や日本とモンゴルの学生、留学生、若手研究者間交流ができ、とても良い経験が得られました。

(担当：平成27年度竜の子奨学生 東京外国語大学大学院 ソルヤー)

編集後記

委員長 電気通信大学大学院 グエン・ドク・ティエン

この度、第17号の編集委員長を担当させて頂きました。編集委員となるのは2回目、編集の進め方などは、経験があったので心配はありませんでした。しかし、今回は論文を執筆中のため、バタバタしていました。担当した近況報告では、現役生やOB・OGの皆さんのご協力のおかげで、制作することができました。編集委員の皆さんにも頑張ってもらって、なんとか第17号の会報誌が完成しました。現役生の皆様、OB・OGの皆様、編集委員の皆様、本当にありがとうございました。

副委員長 東京大学大学院 権 慧

この度は会誌の編集を担当させていただき、本当に良い勉強と良い体験になりました。私が担当した部分は第28回交流会のレポートです。過去の交流会を振り返りながら当時の風景やできごとなどを思い出しつつ、それを一つ一つの文字に変換しました。とても楽しく有意義な時間であり、ぜひ皆さまとシェアしたいです。また、編集にあたって竜の子奨学生たちの頑張っている近況をみて自分もさらに研究に力を入れ、夢に向かって走らなくちゃと思いました。留学生活を支えてくださっている竜の子財団関係者と寄付者の方々に感謝を申し上げます。どうもありがとうございます。

委員 北海道大学 馬 千駒

今回の編集に参加させていただき、大変うれしかったです。会報誌の編集に関する経験がなく、最初は不安でした。しかし、編集委員の皆さんや関係者の皆さんのサポートのおかげで、無事に完成しました。日本語の勉強においても有益な経験となりました。この場を借りて、お礼を申し上げます。

私の担当部分は第28回交流会のレポートです。レポートを書きながら、交流会についての楽しい思い出が目の前にいっぱい浮かび上がってきました。竜の子奨学生になって、素晴らしい友達と出会い、本当によかったです。この感謝の気持ちを胸に、竜の子奨学生の一員として今後も頑張ろうと思います。



第3回編集会議にて

委員 東京外国語大学大学院 ソルヤー

この度、会報誌の編集委員を務めさせていただきました。SPECIAL REPORT IIを担当し、正直、経験ゼロの私にとっては不安でいっぱいでした。1回目の原稿は1600字埋めただけでうまく書けず、「自分自身が伝えたいことは何か？」を考えて、テーマを絞って書き直しました。何とか自分の伝えたいことを表現できたと思います。また、編集委員の皆さんが書いた文章と一緒に添削することは日本語の勉強になっただけでなく、冊子の編集についても理解を深めることができました。非常に貴重な経験でした。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。



第2回編集会議後にて

委員 立命館アジア太平洋大学 シャリアズ エムディ

会報誌を作成した数ヶ月間、編集委員の皆さんと一緒に素晴らしい経験ができました。私は大分県別府市にいますので、直接会議に出席できずSkypeで参加していました。編集委員の皆さんがチームメイトとして友好的に迎え入れてくれたおかげで会議に楽しく参加することができました。私はSPECIAL REPORT Iの担当で、パングラデシュのボランティア経験について書きました。読まれる方が楽しめるよう、文章を工夫しました。

最後に、私にこの素晴らしい経験を与えて下さった竜の子財団とすべての関係者の方々に感謝したいと思います。来年も編集者として参加したいです。



第1回編集会議にて

「その夢はきっと世界を変えていく」

夢 希望をかなえる為 僕たちは生きている
その夢はきっと世界を変えていく 平和のため
いろんな事があるけれども どんなときでも

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（平成21年竜の子奨学生）

仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に
夢 希望をかなえる為 みんなは生きている
その夢はきっと世界を変えていく かならず